

召喚したロリサキュバスと毎日エッチする話

ロリサキュ好きです

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

異世界から召喚した存在との契約が当たり前になつた世界。

そんな世界で、召喚したサキュバスと契約を結んで毎日エッチする話。

本番のある話には☆をつけてあります。

目

次

召喚

契約☆

お買い物デート?

17 7 1

召喚

契約社会。生活のどこかで必ず契約というものが付きまとう世の中だが、今では学生の時点で人生を左右する契約を結ぶのが当たり前になっている。

学費ローンやアルバイトのような一時的なものではなく、文字通り人生と共にするパートナーを決める契約、それが『召喚パートナー契約』だ。

これは日本に限らず世界各国で行われるもので、異界から召喚した異種族と契約を行い、彼等の力を借りるのを目的とした契約でありこれら的能力によってその後の人生が大きく変わる。

いくつか例を挙げるならば、就職、受けられる福祉サービス、周りからの評価etc……。

言うなれば契約パートナーは自分のステータスの1つであり、価値そのものなのだ。

希少かつ優秀な種族を呼び出して契約することが出来ればその後の人生を優位に進められるからこそ、より良いパートナーを見つけるために召喚や魔物との交渉を行う。

これらの行事は高校三年生となつたタイミングで免許獲得が可能なため、その年の高校三年生がこそつて召喚施設へと足を運ぶ姿が見られる。

前置きはこれくらいにしておこう。

長々と社会科の授業で習つたことを振り返つていたが、ついに俺自身もそのパートナー契約を行うことになったのだ。

「ふううう……緊張してきた」

召喚自体は一発勝負ではなく、魔物側と人間側での条件の交渉などが上手くいかなかつた場合は、召喚者と相手や異界との繋がりが消える一週間のインターバルを置いて再度召喚に挑むことができ……それでもやはり運が絡んでくるが。

では目的の魔物が来るまでやり直せば良いと思われるかもしけな

いが、召喚をするのもタダでは無いのだ。

まず召喚に使うための魔石が初回のみ地方自治体から支給されるが、それ以降は持参しなくてはいけない、その需要はとても大きいため相応に価格も高騰しているのだ。

その額なんとひとつ20万円～25万円程、しかも買えるかどうかは自治体の在庫に余裕がある場合に限つての抽選のため、あまり現実的では無い。まあ、国によつては個人での売買が許されている所もあるが、そんな場所では金額が青天井のため優しい方なのかも知れない。

そんな海外への転売を防ぐために色々な法律やマニュアルが存在してたりするが、今は関係ないため省略しておこう。

さて、そんな召喚に挑む俺の貯金残高はバイトやお年玉で貯めた40万円程度のため、チャンスは良くて2回、少なくて1回、追加で挑戦できるがそう多くは無い。

両親からは多少の援助は可能だと言われているが、それでも金額が金額であるし、俺に統いて妹も今後受けとるとやはり早くに契約するに越したことはない。

そんな事情もあり、気合を入れることになんの意味もないのだが思わず力が入ってしまう。

「颶馬 美波さん、召喚室が空きましたので12番の部屋をお使いください」

「あ、はい！」

待合室で座つていると、市役所の係員が呼びに来たため立ち上がる。

「……よし！ いこう！」

役所の召喚スペース。3時間程の待ち時間を経て使用料の一万元を支払い通された一室は、大型の魔物が召喚される場合も考えてかなり広い。

床に刻まれた召喚陣と、召喚石を設置する台座、あとは室内を監視するためのカメラのみ配置されており、他には何も無い殺風景な様子だ。

召喚石を台座にセットすれば勝手に召喚が始まると事前説明をされていたため、震える手で召喚石の設置を行う。

「頼む、贅沢は言わないからせめて就職に不利にならない程度の魔物を……うお!?」

瞬間、光り輝く召喚陣と、巻き起こる突風に思わず顔を腕でおおつてしまつた。

次第に風も收まり、腕の隙間から見えたのは

「女の子……？」

白金の髪が美しい一人の女の子の姿だつた。

「初めまして」

「は、はじめまして……」

「…………」

「…………」

「おわあああ!? 人型?!?!

「わ、びっくりした」 !?!

「いや、びっくりしたのは俺の方ですよ!」

完全な人型の魔物。それは希少であり、正直いつて最高の引きをしてしまつた。

「あ、ああああの！ とりあえず召喚が完了しましたので続いて契約の交渉に入らせてもらえればと、あの、思うんですけど、だ、だ大丈夫でしようか……？」

「ん。その前に、落ち着いた方がいい」「す、すみません……」

想像だにしなかつた出来事に思わずキヤパオーバーしてしまつた。

第一印象最悪だろこれ……とりあえず、契約の交渉に入らないと！

「んつんん！ ありがとうございます。落ちきました」

「ん、良かつた」

「それでは交渉を始めさせてもらいます」

「わかつたけど、もう少し柔らかくていいよ?」

「あ、そ、そう? それじゃあまず俺の履歴書の確認からお願ひしてもいいかな……一応召喚陣の効果でこっちの文字は理解できると思うけど、分からぬことがあつたら聞いてもらえる?」

「うん」

そうしたやり取りを経て、履歴書を手渡すと彼女は受け取った用紙を上から順に確認していく。

そんな彼女の様子を改めて観察してみる。

まず第一印象は『可愛い』だろう。金髪と言うには白に近い白金の髪はとても綺麗で、紫の瞳と相まって美しいという言葉がぴったりなのだが、薄い黒のベビードールに包まれた身体は、かなり幼めの体格をしているため人形のような愛らしさを感じられる。

それから、先程までのやり取りの中で持つたのは少し表情に乏しいという印象だ。俺が大声をあげてしまつた際も、特に表情の変化はなく、履歴書を手渡すまで最初からジッとこちらを見つめているだけだった。

とまあ、少し表情の出にくい可愛い女の子というのしかわからん。
(そういうえば、種族はなんだろうか……)

髪の中からちよこんと尖つた耳が見えるため、エルフか悪魔のだと思うのだけど……

「颶馬 美波くん……?」

「あ、はい! 颶馬美波です!」

履歴書を読んだのだろう、こちらの名前を呼ぶ声によつて現実に引き戻される。

「えつと、履歴書読んだ……」

「それじゃあこれから契約の内容なんかを話し合えればと……」

「わかつた」

良かつた! 高位の魔物だつたり人型だと引く手数多なこともあり、履歴書チエツクの段階で弾かれる場合も多いらしいが、第一関門

は突破出来たらしい。

「まず、自己紹介をお願いします。俺はさつき確認してもらつたよう
に颶馬 美波です」

「ん、私はルナリア。種族はサキュバス」

「はい、サキュバスのルナリアさんで……へ？」

「サキュバス……サキュバス!?

「さ、サキュバスって人のこう……あれをアレする?」

「……？ 多分……？ あ、これ」

さすがに直接的な質問は憚られるため、遠回しに聞いたが上手く伝
わらなかつた……。

「羽根とか尻尾見ればわかるかな……ん」

そう言うと、先程まで気が付かなかつたが、黒くてツヤツヤとした
しなやかなシッポがおしりの辺りからゆらりと姿を現し、コウモリの
ような羽根が腰の辺りに広がつた。

そしてその尻尾の先端。スペードのような形に膨らんだ先端が『く
ぱあ……』と、そんな擬音が聞こえてきそうな様子で開くのが見えた。
思わずゴクリと喉を鳴らすと、サツとしつぽが背中の後ろに隠れて
しまつた。

「……じっくり中を見られると恥ずかしい……」

「うつ」

口元に手を当て、無表情ではあるが少し赤らんだ顔で目をそらすそ
の様子に思わずキュンと来てしまつた、態度に出ないわけじゃないの
ね……。

とはいえ、あの特徴的な尻尾は確かにサキュバスのもので間違いない
。サキュバスということはあのシッポは……。

「つ、すみません、確かにサキュバスのようですね、こちらとしてもル
ナリアさんは契約させてもらいたいので、内容の詰めをして行けた
らなど」

「ん」

「まず、俺が学生なので普通契約がベースになります……召喚陣の効
果で最低限の知識はあるかもせませんが一応確認がてらこちらの

紙と一緒に確認しよう」

そう言つて紙を差し出す。

「この基本契約は、生活の保証なんかを担保に力を貸してもらうという、本当に最低限の内容で……」

「いや、大丈夫」

「へ？」

「一つだけ条件？ 契約の追加？ をさせてくれれば基本契約の内容のままいい」

(???) 基本契約はそれこそ生活さえ保証すれば良いから、かなり人間側に有利な内容のはず……)

「あの、一応内容の確認を……」

「ん、パツと見全部大丈夫。向こうで教わった通り」

「あ、サキュバスはあっちでのコミュニティでそういうことも習うんですね……って、それならなんで!?」

「……？ そんなにおかしなこと書いてないし……」

…………これは……かなりの好物件なのでは……!?

学校や、教習所で習つた内容だと、あとから多少変更できるとはいえ、最初はこの基本契約をベースに月にいくらお金を支給するか、どのようなことをしてもらうかなんかをかなり細かく要望を聞いてお互いの妥協点を探し、追加していくのだが、それらを彼女は知つた上で契約してくれるらしい。

「じゃ、じゃあその追加条件と言うやつを教えてもらえるかな……？」

「うん、追加条件は

毎日私と……交尾して？

契約☆

「毎日私と、交尾して？」

「つつづ！」

「こうび……コウビ……交尾!?こんなに可愛い子と!?俺が!?

「は、はい……」

「ん、よろしく……あ、もしえきない日があつたら、ほかの日に埋め合わせしてもらえれば大丈夫」

「ハイ、ヨロシクオネガイシマス」

これは、現実なのか？初めての召喚で、サキュバスを引き当てる俺にとつて最高の条件での契約？

「えつと、どうすればいいの？」

「ごめんごめん、ちよつとこんなにあつきり契約できると思わなくて放心してた……それじやあこの契約書に今の条件を書き足すから、それに名前を書いて血印を押してくれれば完了だよ」

「ん、わかった」

契約書を書き換え、再度一人で読むことで誤字脱字がないことを確認してルナリアが名前と血印を押す。

すると契約書が端からチリチリと消えて行き最後には完全に消えた。

「よし、これで契約は完了したから、いつでも離れていても擬似召喚魔法で俺の近くに呼び寄せることも出来るし、念話とかも出来ると思います」

「おー……それじゃあご主人様のお家、いこ？」

「あ、その前に……」

「ああ、案内するよ」

部屋から出ようとした俺はその声に引き止められ、振り返ると両手をこちらに向けて広げるルナリアの姿。

「どうしたの？」

「ん、こつち来て」

「?わかった」

近くに寄ると、背伸びしてこちらの顔を両手で包み引き寄せてくる、そして

「ちゅっ」

「!」

「これからよろしく……ね?」

初めてのキスの味は、とても甘かつた。

「?????????????はつ!?」

借りている寮の自室、そのベッドに腰かけたところでようやく頭が回ってきた。

突然のキスに思わず動転してしまった……寮までの道程を思い返して、変なことをしていなかつたため良しとしよう。

「ここ」がおうち……

ルナリアは帰りの道では、さすがにベビードールで人目に付く状態で歩かせる訳にはいかなかつたため、魔法で姿を消しつつ着いてきてもらつた。

電車が空いていて助かつた……。何故ベビードール姿のかは、單に楽だかららしい……これがサキュバスモラルと言うやつか……。

そんな彼女だが、家に着いたところで姿を消すのはやめて現在部屋をキヨロキヨロと眺めている。

「ご主人様」

「ん? なに?」

「ご主人様は一人暮らしが?」

そう首を傾げる彼女に、現在寮に住んでいるため、実家から離れて暮らしていることを説明する。

すると少し口元が緩んだかと思うとこちらに寄ってきて膝の上に座り、俺の顔を見上げて口を開く。

「じゃあ、二人だけの愛の巣……♡」

「うつ」（こんなん好きになっちゃう！）

そんな不意打ちに、思わず胸が締め付けられる。これが恋か!?

そして上から覗き込むような形になつたことで、ゆるゆるなベビードールの胸元が思い切り視界に入つたことで小さな双丘と、桜色のポツチがもろに見えてしまつた。

そこからはもう色々と我慢が聞かなくなつてしまつた。

彼女の全身から香る甘く優しい香りや、膝の上に座つたことで感じる小さなおしり、こちらの腕に巻きついてくる黒い尻尾など、全てが俺の性衝動を高めてくる。

「ゞ）主人様の、おつきくなつた……♡」

「ゞ）、ごめ「交尾」……」

「今日の交尾、しよ？」

「ルナリアあ!!!」

「わつ」

抑えの効かなくなつた俺は思わずルナリアを持ち上げ、ベットへと押し倒す。

ベビードールはめくれ上がり、レースで隠しきれていなかつたお腹や紐パンがモロに見えるようになつた。

その扇情的な姿に、さらに興奮が高まるのを感じる。

「ちゅっレロッ……じゅるる」

「んつちゅつ……♡じゅるつ♡」

整つた顔に近付き、小さな口を貪るように味わう……サキュバスという種族の特徴なのだろうか？彼女の唾液は想像よりもずっと甘く、砂糖でも分泌されているのかと思うほど美味しかつた。香りも甘い果実のようで至近距離で感じる五感全てで快楽を感じることが出来、それだけで射精しそうになるが構わずキスを続けつつ身体をまさぐる。

少し芯を感じる胸の先っぽをグリグリと押し潰してやれば、さらに彼女の舌の動きが早くなり、両手で顔を引き寄せてくる。

「ぷはつ」

「はあ、はあ……ゞ）主人様、もつと」

両手を伸ばしてオネダリしてくるその様子にさらに股間が張りつめるのを感じる。

それに気がついただろうルナリアはじつとズボンの山を見つめてくる。

「ルナリア」

「ん？」

「おねだり、できるか？」

そう聞くと、表情こそ余り変わらないが、期待に目を輝かせ……いや、実際に紫の瞳がぼんやりと光つており、コクリとひとつ頷くとベビードールの肩紐を外してショーツだけになり、足を広げて上目遣いでオネダリをしてくる。

「ご主人様♡ルナリアの全部食べてください♡」

そう言つて足を広げ、びしょびしょになつた穴あきショーツを見せつける姿は正に淫猥で、とても愛おしいものだつた。

っ!!!

服を脱ぎ捨て、ルナリアへと覆い被さつて下腹部にギンギンになつたペニスを乗せる。

凶悪なまでに膨張した肉棒が小さな彼女のへその上辺りまであるのを見ると、さらに興奮が高まつてくる。

「挿入れるぞ」

「ご主人様、めしあ、が……おお♡?!?」

言い終わる前に、ショーツの穴から思い切りルナリアの膣へと肉棒をたたきこむ。

途端に先程までとは比べ物にならないほどムワリと甘つたるい匂いが鼻腔に広がり、同時にお腹の辺りに暖かいものを感じたため、結合部を見ると処女だつたことを示す血と、それを洗い流すように吹き出す潮が見える。

「処女だつたのか……」

「ご主人様♡ご主人様♡」

挿入れただけでイつたらしいルナリアは俺の事を何度も呼びながらビクビクと痙攣している。

そんな姿に思わず抱きしめて見れば、さらにエビ反りになつて潮を吹きだす。

どうやらとんでもないエロサキユバスのようだ。処女喪失で潮を吹き、抱きしめて子宮口をグリグリするだけでイキ散らすとは将来有望すぎる。いや、サキユバスはみんなこんなもんなんのか？

「ふうー♡ふうー♡ご主人様、動かないの？」

そんなことを考えつつ、ルナリアのイキっぷりを見ていると、落ち着いてきたらしい彼女がそう聞いてくる。

「いや、初めてだつたらしいし、イつてたから大丈夫かなつて心配に思つて」

そう聞くと、目を少し驚いたかのように開ける。

「ご主人様、優しい。すき♡大好き♡」

「おおおおお!?」

目にハートを浮かべ、そう言つてくることに嬉しくなるが、急に膣内が蠢き、締め付けが強くなつた。

股間の急激な快感に思わず腰を引いてしまう。

「おまんこ抜いちゃイヤ、サキユバスはどれだけイツても気持ち良くて辛くないから。いっぱいいいっぱいイかせて。」

「ああ、わかつたよ」

「ん、ご主人様♡」

ぱちゅん♡ぱちゅん♡

うねうねと蠢き、精子を搾り取ろうとしてくる膣から限界までちんこを引き抜き叩き込むと、白く泡立つてきた愛液が弾け、水っぽい音が部屋に鳴り響く。

「あつ♡うつつ♡ごしゅじんつ♡しゃま♡チューしてつ♡あむつちゆるつ♡」

「ふーっ！じゅるるるつちゅつれろつ」

ひたすら抽挿を続け、こちらの唾液をたっぷりと飲ませてからルナリアの甘い唾液を吸うのを繰り返す。

引き抜く度に行かないでと抵抗する膣の締めつけと、お互いの唾液を交換することで一気に射精感が強まり……

「ぐつ、イクつ！」

ビュルルルル！ドプつビュルツ！

人生で一番の量だと確信できる長い射精。

「あああああ♡ご主人様のせーえき♡美味しい♡」

「うおつ締め付けヤバつ」

膣全体がピツタリとちんこを包み込み、決して離すまいと吸い付いてくる。

それに応え、完全に降りてきたらしい子宮を思い切り押し潰し、腰を上下左右と揺らして鈴口を押し付ける。

プシツ

イキ潮をまた吹き出すルナリアだつたが、お腹をさすりつつ、こちらに話しかけてくる。

「ご主人様♡美味しかつた♡」

「そ、そうか。俺もすごく気持ちよかつたよ」

「ん、嬉しい♡……あのね？サキュバスの契約にはもうひとつ特別なものがあるの」

「ん？どういうことだ？」

「ご主人様、ここ見て？」

そう言つて摩つていた下腹部を示すのにつられ、そこに視線を落とす。

「これは……タトウー？」

「これはね、淫紋♡」

「つ」

「あつ♡おつきくなつた♡」

ペニスの形に少し盛り上がつたヘソ下あたりに、ハートに茨のような紋様が浮かんでいたのだ。

余りのエロさに股間が先程までよりもさらに固くなるのを感じる。「サキュバスがご主人様だつて認めた時に現れてね？今は薄いピンクだけど、これが完全なピンク色になるまでご主人様のせーえきを注ぐの♡」

「そうすると……どうなるんだ？」

「ご主人様のサポートのための力が増えて♡」

「…………」

「おっぱいからミルクも出るようになつて、いっぱいいっぽい、ご主人様さまのおちんぽ元気にできるようになるし♡」

「…………」

「ご主人様のおちんぽ様に加護を与えていっぽいぴゅつぴゅできるようになつて♡」

「…………」

「ルナリアはご主人様だけのモノになつて、ご主人様のおちんぽ様のお嫁さんになつちゃうの♡」

チツ

「?????????????????????今、何時だ……？」

心地よい倦怠感の中、上体を起こして時計に目をやる。

午前8時。

「ふう、ヤリ過ぎたな……」

そうつぶやき、自分の股座に目をやると、煌々と輝くピンク色の淫紋を晒し全身を精液濡れにした白金の美少女が、肉棒を膣で咥えたまま気絶していた。

「よつ、と」

「おつ♡」

気絶した彼女から肉棒を引き抜く。

喘ぎ声とともに精液を溢れさせる姿に思わず勃起してしまうが、さすがに疲れてきたため気絶した彼女をオナホールにするのはやめておく。

「しかし、凄かつたな……」

朝飯としてコーンフレークを取り出し、皿に出してミルクを注ぐ。それをスプーンで口に運びつつ、昨日の交わりを思い出す。

昨日、淫紋の説明をされた俺は理性が完全に崩壊し、ひたすら彼女の幼い身体を貪っていた。

紋様の色が濃くなるにつれ肉棒を好きなように勃起させることができ、しかも、キスをする度に性欲が湧いてくるのだ。

桃のような香りのするお漏らしをペニスに浴びた時などは、もはや興奮し過ぎて抜かずの連続中出しまでしてしまった。

結局、昼頃から交わり始めたはずが、夜中までヤリ続けていたらしく。

「どれくらい出したんだろうな……お？」

「んつんう……ごひゅじんひやま？」

朝飯を食べていると、モゾモゾとルナリアが起き上がるのが見えた。

「おはよう、ルナリア」

「んつ、ご主人様、おはよう」

「朝飯は……と、その前に体流すか？」

「うん、流す……精液いっぱい食べたから大丈夫だけど、後で食べ物も食べてみたい……」

「了解」

土日で助かつた。タイマーで休日は朝に風呂が自動で貯まるように設定しているのだ。

フラフラとこちらに来るルナリアの手を引き、風呂場に連れてくると「一緒に入ろう?」とオネダリされ、お互い裸だったためそのまま浴室に入る。

「じゃあシャワーかけるからな」

「んつ」

シャワーから出る水が暖かくなるのを確認してから、ルナリアの身体を洗していく。

女の子の肌に、目の洗い洗体タオルを使つて良いのか分からなかつたため、今日買い物に行くついでにその辺も揃えようと考え方つ、手

で伸ばしたボディソープで洗っていく。

「今日はルナリアの服とか日用品を買いに行こうな」「ん、ご主人様ありがとう」

「どういたしまして」

精液に塗れた髪が心配だつたが、髪質が特殊なのかお湯で流していくだけで固まつた精液がポロポロと落ちていくのには驚いた。

シャンプーを行い、リンスをつけて流したところで、自分の体を洗おうとする。

「ご主人様、ルナリアが洗う」

「え？ ああ、お願ひ」

座る場所を交代すると、背中に柔らかく、ヌルリとした感触が。

「!? 普通に洗つてくれていいからね!」

「……? ダメ……?」

うつ

「いや、ダメじゃない……けど、さすがにタオル使わないと垢が落ちないんじゃないかな?」

「それなら魔法で綺麗にできるよ……?」

「……まじか」

「ん、じゃあ続きを……」

「までまでまでまで!」

「?」

慌てて止めると、またも不思議そうな顔でこちらを見つめるルナリ

ア。

「そんなことされると勃つちまうから、この後ご飯食べて出かけないといけないだろ?だからエッチなことは一旦やめておこう? な?」「わかった……」

ふう、何とかなつ「ご主人様に、いっぱい可愛がつて欲しかった……」た……

「あー! やっぱりムラムラしてきたから少しだけエッチなことしてもらおうかなー!!」

「ん! ご主人様、頑張る!」

俺は可愛い契約パートナーを今後甘やかさずにいられるのだろうか……？

ちなみにこの後、ルナリアをおちんぽケースにして4回出した。

お買い物デート？

何度かの交わりの後、お風呂から上がった俺は人間界の食べ物に舌鼓を打つているルナリアの髪の毛をドライヤーで乾かしてやつていた。

同じシャンプーやリンス、ボディーソープなんかを使つたはずなのに、優しく甘い香りがするのはサキュバスの種族特性なのか、女の子だからだろうか？

「美味しいか？」

「うん、今まで果物か精力しか食べたこと無かつたから、こういった味は初めて」

そういう彼女のシッポはご機嫌にゆらゆらと揺れており、後ろから見える尖つた耳もピコピコと動いてとても上機嫌そうだ。

「それは良かつた……それにしても、サキュバスって果物しか食べないのか……」

「んーん、私が植物由来のサキュバスだつたから」

「？ サキュバスにも種類があるのか……？」

「うん、サキュバスは自然界に存在する生物が魔力で変質して産まれてくる。猫が変質すれば肉食メインの猫耳が生えたサキュバスになるし、魚なら人魚みたいになる。私は植物由来なのと、甘くて美味しいから果物とかを養分にしてた。まあお肉も普通に食べられるけど……習性？」

初めて知るサキュバスのあれこれに思わず「へ〜」という声が漏れてしまう。

猫耳のサキュバスとかも見てみたいな。

「まあ、コーンフレークとか他のものも食べられるなら良かつた。と
いうか、あれ？ 今のは話だとどこでサキュバスが発生するか分からな
いから、コミュニティを築くのも難しいんじゃ……」

「サキュバスは夢魔つて名前があるけど、その力で夢の世界を通して
繋がっているからそれで新生したのを感じて、互助会が保護してゐる

みたい

「凄いな、しかしまあ互助会か……」

「？ 気になるの？」

「まあ、あんまり想像が出来なくて」

そう告げると、彼女は互助会について教えてくれる。

「んつと、サキユバスはどこでも発生する可能性はあるけど、頻度はすごく少ないから貴重で、互助会でもないと仲間がいなくてすぐ襲われたりして死んじやうから生き方を教えてくれたり、こっちの世界に出稼ぎに出たサキユバスが得た精力を夢を通して向こうに送つて備蓄して、それを配給したり？」

「おお、異世界は思つたより過酷だつた……ルナリアも精力を送つてるの？」

「ん、送つてる」

そう言いながらお腹を摩つているため、そういうことなのだろう。しかし、彼女が向こうで精力を得たことはあつたのに処女だつたのは配給された精力を摂取していたからなのか。

「だから交尾が報酬替わりでもあつたのか」

「うん。ご主人様の精液は凄いから夢の中でみんな喜んでた」

「凄い……？」

「私と相性が良くて、精液からエネルギーに変換する効率が高かつたのか一度に沢山送ることが出来た……あと、私は植物由来のサキユバスだからエネルギーが甘くて美味しいって」

相性やら味やら色々でてきたけど、俺とルナリアの相性がいいなら良かつた。

「まあ、上手くやつて行けそうでよかつたよ」

「ん、ひと目で魔力の相性がいいと思つたけど、身体もピッタリで気持ちよかつたから毎日気持ちよくなれて私も嬉しい」

そういう彼女はうつすらと笑みを浮かべており、とても綺麗だ。
「よし！ 食べ終わつたら出かけようか。服は出しておくよ」

「ご主人様とデート、楽しみ」

「俺もルナリアとのデートは楽しみだよ」

そう返すと彼女は、一瞬黙つてから口を開いた。

「ルナリアじゃなくてルナって呼んでいいよ？」

「えう？　じゃあ……ルナ。改めてよろしく」

「ん？」

「…………主人様とデート。」

前を上機嫌に歩くルナリア……ルナのパークーの裾から飛び出た、ゆらゆらと揺れるしつぽを目で追いながら着いていく。

その後予備のパークーとジャージを何とか着せ、近くのショッピングモールへと足を伸ばしていた。

「気になるお店があつたらいくらでもみてつていいけど、まずは服だけ買っちゃおうか」

「ん、わかった」

あつちこつちと見ていた彼女はくるりと振り向くと、手を伸ばしてきたためその手を掴む。

「この辺は結構女性向けの服が多いけど、どこか気になるお店はあった？」

「んーと、あそこ？」

そう言つて指さすのはフリフリとしたファンシーな衣服が多く展示してあるお店で、小さめのものや、少し奥には下着類も置いてあるのがわかる。

「よし、じゃあ見に行こうか」

「うん」

ちよつと早足になつたルナを微笑ましく思いつつ、手を引かれる形で店に入る。

入口からはよく見えなかつたが、壁にもたくさん種類のフリフリとした衣服が飾つてあり、落ち着いた店内BGMや木張りの内装で可愛らしくもすこし上品な様子に、女性向けのお店に初めて入ることで緊張していたが、ほんのり落ち着けた。

他のお客さんは余りおらず、店員さんがカウンターでなにかの作業を行っているのと、棚の周りでなにかしているのが見える程度だ。

しばらく服のデザインなどを見つフルナと話していると、ふと服や下着のサイズがどうすればいいか分からぬことに気がついた。

ルナに聞いてみれば、以前までは最初にあつた時のようになベビードールと紐で結ぶタイプの下着だつたようで、詳しいサイズは分からぬという。

店員さんを探そとキヨロキヨロしていると、目が合つた一人の店員さんがこちらに話しかけてきた。

「いらっしゃいませ、なにかお困りですか？」

「はい、実はこの子の下着とか服を揃えたいんですが、サイズが分からなくて……」

「分かりました、では更衣室の方で測りましょうか？」

「よろしくお願ひします」

そうお願ひし、ルナを任せると手持ち無沙汰になり、男一人になると少しソワソワと/orします。

しばらく店の入口辺りのマネキンに着せられた服なんかを眺めていると、いくつかの下着と紙を持ったルナが戻ってきた。

「ただいま。これ、サイズのメモとちょうどいい下着……買つていいく？」

「おかげり。全然いいよ、それじゃあ服も買っちゃおうか」

「ん、ありがとう」

カゴを取つてそれに持つてきていた下着を入れると、改めて一緒に服を選んでいく。

いくつかルナに試着してもらい、感想を聞くと楽だということもありワンピースタイプの服が気に入つたようだ。

ルナに頼まれて俺もひとつ淡い青のワンピースを選ぶと、いくつか気に入つたらしい服を選んで、購入する。

「ありがとう、ご主人様」

俺の選んだワンピースに着替え、店を出た彼女が礼を言つてきたので頭を撫でるとグリグリと他に頭を押し付けてくるその様子に笑み

が漏れてしまう。

「よし、じゃあ靴とか日用品も買わないとな」

「うん」

そこからはルナが様々な人から視線を集めていたが、辺に絡まれることも無く見て回ることが出来た。

いくつかの店で靴や日用品、衣類なんかを買い途中クレープを食べたりそれなりに楽しんだことで満足したのか、そろそろ帰ろうという話になつたため帰路に着いた……のだが、その途中少し奥まつたところにある店にルナが興味を示したため入ることになる。

「ご主人様、ここすごい」

「あ、ああ、うん。 そうね」

その興味を示した店というのは、外観からは中が一切見えず、R 18 の暖簾や窓の黒貼りにルナが興味を示していた。

入つてみれば男根を模したカラフルな模型や、シリコン製の商品などが飾られた……まあ、有り体に言うとアダルトショッピングと言うやつだ。

ルナの容姿や年齢もあり入るのに躊躇してしまつたが、そこはサキュバスモラル。

ルナがドンドンと歩を進めてやむなく入店。

店員の見る目が凄かつたが身分証で年齢だけ店員に開示し、極力そちらに目を向けないようにしつつ店内を物色する。

俺自身は18歳を迎えており、ルナも幼いが異種族に対する法律などもあつてこういった場所で買い物をしても店側が罰されることはない。

「ご主人様、私に使いたいものある？」

「つ」

そう言つて見上げてくる彼女の幼い容姿と、背後の淫具のギャップに思わず唾を飲み込んでしまう。

「そうだな……」

期待の眼差しを向けるルナに答えるため、また家で可愛がつてやることを考えつつ商品を見る。

デイルドが彼女の脇内につき立っているのを想像したが、サキュバスの処女を破り淫紋の加護を得た自分の肉棒があまりにも太く長く立派になつていたため、あまり魅力を感じない。

カラフルな男根達から視線を外して、バイブやローター、ローションにナルプラグと様々なアイテムを確認し、カゴに入れていくと装のコーナーに入つた。

ものが物だけに試着できないが、サイズだけ見てヒモ水着やスケベ下着、バニー服やネココス等もどんどんカゴに入れていく。どれも紐で固定する関係上、最低限のサイズさえ合えば大丈夫だろう。

「よし、こんなところか……」

「おおー」

気がついた時にはカゴいっぱいにアダルトグッズが入つていたが、それを見てルナは自分に使われるのを楽しみにしているらしく、尻尾がフリフリと動いているのが見える。

契約が上手くいかなかつた場合の召喚やり直しのために貯蓄していたこともありこれだけ買つてもまだ余裕があるため、安心して会計を済ませに行くと店員にまたも凄い目で見られてしまい、ちよつと気まずかつた。

「ゞこ主人様、またゞこ来よう？」

「あー、うん、そうね」

ちよつと気まずいのと周りの視線が気になつたため、曖昧に返事をした。

まあ、後々常連になつたのだが。